

に此の時代には回鶻の勢力は全く唐を抑壓し、唐は其の下に在りて、辛ふじて社稷を保つに過ぎざりしが如し。

當時回鶻の唐に對する横暴の有様は詳かに諸史の載する所にして、寶應元年九月には、史朝義討伐の爲に、天下兵馬元帥に任ぜられたる雍王适(後の德宗)が陝州の近傍に於ける可汗の營を訪ふや、可汗は之をして舞踏せしめんとし、其の能はざるや、王に扈從せし藥子昂・魏琚・韋少華・李進等の顯官を榜ち、韋少華・魏琚をして死に至らしめ、次で回鶻軍の進みて洛陽に入るや、洛陽の子女其の殘忍の行爲を懼れ、聖善・白馬の兩寺内に避けしかば、彼等は火を兩寺に縱ちて萬餘人を殺し、河陽に屯するや、營を去ること百餘里の間を剽劫し、史朝義の亂平ぎて可汗〔九四〕の國に歸らんとするに當りては沿道を抄掠し、給與意に満たざれば則ち人を殺して憚るなく、大曆七年正月には、回鶻の使者は擅に鴻臚寺を出で、子女を掠め、之を禁ぜんとしたる官吏を毆撃し、且つ金光、朱雀の兩門を侵し、同年七月又擅に鴻臚寺を出で、長安令邵説を逐ひ、其の馬を奪ひ、同十年には其の部人は長安にて白晝人を刺し、有司の之を捕へて獄に繋ぐや、其の酋長は獄吏を斫りて囚人を奪ひしが如き、今一々其の例を擧げるの煩に堪えず〔九五〕、殊に注意すべきは、肅宗代宗以來、回鶻人の公けに唐に來朝するもの、外、商販の爲に、兩京太原等を始め、諸方に滯止するもの少からざりしが、此等の商賈が國勢の盛大を憑みて、至る所に貪横を恣にし、大に唐を苦しめたることなりとす、新唐書回鶻傳に建中元年(即ち代宗の大曆十四年の翌年)新可汗に對する冊命使を送りたることを記せる續きに「始回紇至中國、常參以九姓胡、往往留京師至千人、居貲殖產甚厚」として此の時以前に於る情態を記せるが、通鑑大曆十四年七月庚辰の條下には「詔回紇諸胡在京師者、各服其服、無得效華、先是回紇留京師者、常千人、商胡僞服而雜居者又倍之、縣官日給饗餼、殖貲產、開第舍、市肆美利皆歸之、日縱貪橫、吏不敢問、或衣華服、誘妻